

新潟大学災害・復興科学研究所
共同研究報告書

明治期新潟県における大規模水害と地域社会の変容に関する研究

— 彌彦神社所蔵資料にみる 1896 年「横田切れ」 —

研究代表者氏名 田邊 幹¹⁾

研究分担者氏名 中村 元²⁾

1) 所属 新潟県立歴史博物館 2) 所属 新潟大学災害・復興科学研究所

研究要旨 (10.5 ポイント)

(400 字以内)

本研究は 1896 年 7 月に発生した「横田切れ」とその復興過程およびその後実施された信濃川の抜本的な治水事業である大河津分水事業に対し地域社会がどのように対応し、変容していったのかを明らかにすることを目的とする。そのため当年度は地域社会の信仰の中心的存在であった彌彦神社所蔵資料について、その成立過程および構成の研究、詳細画像の作成、主な資料の分析を行った。彌彦神社所蔵の「横田切れ」、大河津分水関連の資料には彌彦神社が行った祭礼に関する資料のほか、奉納された資料群があり、奉納者の出自の分析から奉納者である地域のリーダーたちが村を越えた活動をしていたことが分かった。「横田切れ」の前後期を含め、大河津分水事業の構想・請願には地域のリーダーたちを生み出した江戸時代後期以来の私塾や戊辰戦争時の人的ネットワークが寄与していることが分かった。

A～G (10.5 ポイント程度)

A. 研究目的

1896 年 7 月に発生した「横田切れ」は、明治維新以降、農村からの人口の流出、自作農の没落などによって江戸時代以来の村落の共助慣行が解体し、農村構造が変化していく時期に発生し、その被害をより深刻なものにしたと考えられている。一方で、国家による信濃川の抜本的な治水対策事業である大河津分水の建設の契機ともなつたとされている。この過程を検証することによって、日本の近代化過程における地域の変容と災害、そして国家的大事業がどのように関わり、地域を更にどのように変容させていったのか明らかにすることを目的とする。

その中で、本年度は当該地域の中心にあり、信仰の対象となっていた彌彦神社に所蔵されている資料を中心に研究を進めた。

B. 研究方法

彌彦神社に所蔵されている資料はかつて、信濃川大河津資料館で調査を行い、マイクロフィルム等で撮影されていたものの、その後、活用できない状況となっていた。また、マイクロフィルム等も劣化やメディア自体の老朽化によりこれらから研究を進めることが難しい状況であった。そこで、本年度は以下の方法で研究を進めた。

- ① 彌彦神社所蔵資料の形成過程の研究
- ② 彌彦神社所蔵資料の詳細画像の撮影
- ③ 彌彦神社所蔵「北越治水策」の資料研究

C. 研究結果

①彌彦神社の所蔵資料は概ね、その成立過程から i 彌彦神社の運営に関する資料、ii 彌彦神社宮司高橋家に関する資料、iii 彌彦神社に奉納された資料、iv 彌彦神社徴古館準備のために収集された資料、に分類することができる。「横田切れ」と大河

津分水に関する資料はその中で i、iii、iv に分類することができる。i は彌彦神社で行われた大河津分水工事に関する地鎮祭等の祭礼に関するもの、iii は「横田切れ」直後に祈願のために奉納されたもの、iv は明治 45 年の火災で彌彦神社が焼失した後の復興にあわせて計画された徴古館（歴史博物館）構想の中で収集された資料で、新潟県内、特に中越地域の近代前期における著名人の事績に関する資料が多く含まれている。

②ではこのうち、iii に関連して近世以来の治水を請願する際の絵図・図面について撮影を行った。そのうち、資料研究を行ったものが③である。

③の「北越治水策」は南蒲原郡杉之森（現長岡市）の庄屋の家の出身である高橋竹之助が作成し、弟子で図を描くなど作成を補助した古志郡撰田屋の川上半四郎が奉納したものである。川上によると、この治水策は竹之助が以前から訴えていたことに図解を附して、山県有朋、松方正義に建議したもので、二部作成され、一部が山県・松方へ、一部が漢詩を二詩附して彌彦神社に奉納されたことが分かる。

竹之助は長善館などで学び、漢学や尊皇思想を身に着け、戊辰戦争においては新政府軍の先鋒嚮導を命ぜられ「方義隊」を組織し活躍し、「治水策」の建議先となる山県の信任も厚かったようである。戦後は東京遷都に反対して収監され、出獄の後には長岡で漢学塾「誠意塾」を開設した。

治水策の第一図には康平三年の越後古図が掲載されている。この越後古図は古代の越後の様子を想像して描いたとされており、江戸時代後期から明治時代初期にかけて長善館出身者を含め越後の文人たちの間で広く流布していたようである。絵図は信濃川・阿賀野川の河口から長岡付近までの越後平野がすべて水の底として描かれており、「北越は本一大海湾にして、今の古志郡蔵王を以て港口と為す。」とあるように海の底であったとされている。この越後古図を冒頭に持つところから、竹之助の治水構想は越後の文人たちの間で伝統的に構想されていたものであったことが分かる。なお、この海の底となっている地域は第二図でも示されている「横田切れ」の水没地域とほぼ一致しており、構想の的確さを物語る。また、分水の構想を描く第四図、第五図では大河津分水のほか、関谷分水、加治川分水路が描かれ

ており、構想の先進性を指摘することができる。

D. 考察

彌彦神社は地域の信仰の中心であり、明治維新以降、方義隊出身者が宮司を務めるなどしたこともあり、「横田切れ」や大河津分水の関係資料が蓄積されたと考えられる。

大河津分水計画には江戸時代以来の長善館を中心とする文人ネットワークが重要な意味を持っていた。特に、幕末期から戊辰戦争期の支配領域を越えての尊皇活動の人的ネットワークが寄与しているのではないかと。

なお、竹之助や川上半四郎は大河津分水よりも上流の出身であり、自らの村の治水に大河津分水は直接寄与するものではない。が、大河津分水事業を建議していることは、彼ら地域のリーダーの「地域」が出自を越えてより広域的になっていたことを物語るものなのではないだろうか。

E. 結論

大河津分水という国家的プロジェクトの実現に際し、藩や村といった旧来の支配を前提とする地域を越えた、私塾が生み出した学術ネットワーク、人的なネットワークの果たした役割の大きさを明らかにすることができた。今後は、これらが庶民、村落社会にどのような影響を与えていたのか、村落社会の変容にどのように関わっていたのかを検討していきたい。

F. 研究発表

1. 論文発表（掲載誌名・巻号・頁・発行年を記入し、掲載論文あるいはPDFファイルを別紙で1部提出）

なし

2. 学会発表（学会名・発表年月・開催地なども記入）

なし

G. 知的財産権の出願・登録状況（予定を含む）

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし